

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第12号 2025.3.20

UMA（未確認生物）！ ツチノコ？

的場 亮一

今から約45年近く前、1980年秋のこと。職場の同僚4～5人で、週末に比良の山に日帰りハイキングに行った。山歩きが好きなKさんとTさんがルートを計画した。

当日はイン谷まで車2台でいき、今はなくなったが、そこから比良登山リフトそして比良ロープウェイと乗り継いでまずは北比良峠にでた。初心者向けの楽なコースにしたということで、ここまでは確かに歩くこともなく楽だったがそのあと武奈ヶ岳山頂にいき、次第にわれら初心者にはきつくなってきた。その時のルートは、今地図(図1)をみながら思い起こすと次の通りだった。

イン谷→北比良峠→イブルキのコバ→武奈ヶ岳→ワサビ峠→中峠→金糞峠→北比良峠→カモシカ谷→大山口→イン谷

特にワサビ峠から谷に下りすぐに上り、やっと中峠についたと思ったらまたまた下り、そして長い上りでようやく金糞峠。とても初心者コースとは思えなかった。健脚のKさんとTさんはどんどん先にいくのだが、私をふくめEさんWさんの3人はフウフウいいながら、つい休憩時間も長くなり、だいぶ距離もはなされながらついていった。幸い標識もしっかりしていて、ルートを間違えることはなかった。



図1 当日のルートを黄色で示す。○が目撃現場

そんなことでようやく金糞峠にたどり着いたわれら3人は、長めの休憩後、気を奮い立たせて最後の上り坂を北比良峠目指して登っていった。金糞峠からは急な登りの狭い尾根道で、右びわ湖側は深い崖、足元の地面は崩れた土でとても滑りやすかった。滑って転んで崖に落ちないようにと、恐ろしい崖を横目に細心の注意で足元を確認し緊張しながらゆっくり上っていった。

しばらくしてようやく右の崖がなくなり傾斜もなだらかになり、張り詰めていた緊張もとけ、道の左右を眺める余裕もでてきた。記憶では道幅は1mあまりで左側は傾斜になっていて広葉樹林がいっぱいだったが、道のすぐそばには背丈10cm～20cm程度の草が生えていた気がする。

突然目の前3mほどの左の草むらの上に頭をだしている不思議な生き物が目に入った。後

ろからやってきた E さんと W さんにも、声を出さぬようと人差し指を口に、片方の手でその生き物を指でさし教えた。足を止めた二人もすぐに気が付いた。あとでスケッチブックのメモをみると、金糞峠から約 300m ほど進んだ地点だった。一体何かわからないが、初めて目にする不思議な生き物で、見たところなんとなく愛嬌のある顔で、胴は寸胴でずんぐりとしている。

知る限りヘビの体形ではない。頭から胴体そして尾の先まで背中面は鮮やかな緑色で、喉から腹部までは、これまた鮮やかな薄い黄色だった。そして、さらに不思議なことに、頭部に 3 本の角状のものが付いていた。小さなカエルを飲み込んだのかと一瞬思ったが、カエルの足ではなかったし、しかも 3 本というのは、どういうことか想像もつかなかった。

驚きながらじっと見ていたその時、カメラを持っていたことを思い出し、あわてて写真を撮ることにした。カメラはピッカリコニカ C35。このカメラ、露出は自動だが、ズームはついておらず、焦点距離は自分でレンズを回し設定しなければならない代物。相手から目を離さずに、そっとリュックを下ろし、カメラを取り出している間に、しかし相手は静かに動き出した。動くといっても、ほぼまっすぐに後退する不思議な動きで、よく見ると約 60 cm ～ 70 cm ほどの体長。とりあえず逃げられる前にシャッターを切ることにし、数枚撮った。

当時はフィルムカメラで、36 枚撮り ASA100 のフィルムをいれていた。フィルムはまだだいぶ枚数が残っていたが、撮った写真を早く見たかったので翌週さっそく DPE を受け付けている職場の売店に持ち込んだ。

その不思議な生き物は私だけでなく、E さん W さんと私の 3 人が目撃していたので、職場でもさっそくその話になり、それぞれが観察した形状や特徴などを、思い出してお互い出し合ったが、当然ながら 3 人とも至近距離で同じものを見ていたので、その生き物については異口同音にほぼ同じ形容、同じ印象だった。

数日後写真が出来上がってきたので、どんな風に写っているかとさっそく見てみた。しかし、残念！どの写真もはっきり映っていたのは周囲の広葉樹だけで、肝心の生き物はわからなかった。シャッターを切ったのが遅すぎ逃げてしまったのか、焦点距離設定が合っていなかったのか、それとも AE で自動露出設定のため周囲全体の明るさに合わされて、肝心の生き物がいたところが暗く写りすぎたのか。いずれにしろ、3 人が非常にがっかりしたことは言うまでもない。

その後まもなく、岐阜県だったか和歌山県か徳島県の山奥だったか記憶は定かでないが、ツチノコが目撃された、捕獲したら 100 万円の懸賞金がでる、といったニュースが出回った。ツチノコの話はかなり昔から伝説のようにあったが、あれはツチノコだったのだろうか？

半月後くらいに、目撃現場を知っている 3 人で、捕獲に行き 100 万円をもらおうかという話がもちあがったが、もう日がたちすぎているので、同じ場所にいることは期待できず、広い山中を探すのは不可能ということになり、断念した。

写真も撮れなかったので、記憶が薄れないうちに記録しておこうと、スケッチブックにメモしたのが、これだ(図2)。たしか、目撃後約3か月近くたった年末に書いたと記憶している。写真も撮れなかったので、記録としてこれを書いていてよかった。これを見ると、あの時のことが鮮明によみがえってくる。ハイキングの細かなルートもこの図と地図を見て思い出した。

何かきっかけがあれば、芋づる式に記憶が引っ張り出されてくるが、そのきっかけがないと、貴重な記憶も頭のどこかにしまわれたままで、日の目を見ないで終わってしまう。そういう観点では、日記風にブログを書いたり、記録写真をテーマごとのアルバムにするのも、記憶を思い起こすよいきっかけになると考えている。

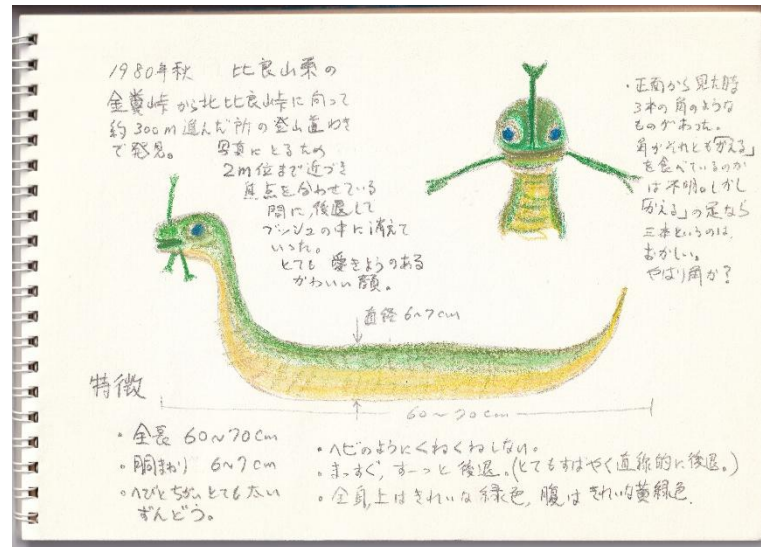


図2 当時スケッチブックに書いた記録。色鉛筆で書いたが、実際の色もこんな感じで明るかった

大原 ルートセンサス報告

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

大原の昆虫については2005年から2008年に行われた昆虫の生息調査をもとに昆虫目録が作成された。しかし、その後のオオムラサキの保護活動の中で目録に記載されていない種も多数見つかった。そこで大原の昆虫を再調査することになった。

調査にあたっては、昆虫と環境との関りも重視して「ルートセンサス」による方法で調査することにした。ルートセンサス法は調査するルートを設定し、ルートを歩きながら見られた昆虫の種類と個体数を定期的に調べていくものである。

得られた結果をもとに、大原の昆虫と環境の現状と将来について考えていきたいと考えた。

2. ルートセンサスの方法

網室から出発して、できるだけ多様な環境が調査できるようなルート考えた(図1)。ルートは網室をスタートして草地か

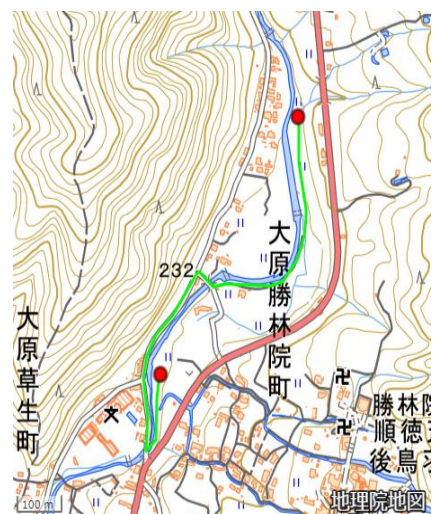


図1 ルートセンサスのコース(緑色の線。下の赤丸が始点、上の赤丸が終点)

らササの群落を通り川の横の桜並木の道から橋に出る。橋を渡り旧道を北上する。舗装道路の川側はずっとヨシの群落が続く。反対側は人家から樹林の林縁へと変わる。林縁は多様な低木で構成されている。

ほどなくして対岸へ渡り北上する。川の横は桜並木が続き反対側は草地や草原、畑地である。並木が切れるあたりからは開けた草地と草原、畑と水田を通る道となり林縁まで続く。

調査対象は、チョウ類とトンボ類にし、ルート内を歩行中に発見した種類数と個体数を記録していった。

調査は、2023年には5月から11月までに月1回、計8回行った。2024年は日本チョウ類保全協会のモニタリング調査に参加することとなったことにより、月に2回を原則に、4月から11月まで15回実施した。

3. チョウ類調査結果

2023年と2024年の調査結果を表1と表2に示した。

調査で記録できたのは、2023年は44種635頭、2024年は42種1,591頭であった。種類数については、春から初夏にかけて増加し、盛夏には減少する。しかし、秋に近づくにつれて再び増加し、その後は減少する傾向が見られた。

出現時期についてみると、モンキチョウやツバメシジミ、ルリシジミなどのように春に多い種とウラナミシジミやチャバネセセリ、イチモンジセセリのように秋に多い種がある。

一方、周年を通して見られる種でも、モンシロチョウのように春には多いが夏以降は個体数を減らす種やヤマトシジミやキタキチョウのように秋に個体数を増やす傾向のある種も見られた。

生息環境を考えると草地や草原に生息する種が多く、樹林周辺に生息する種は少なかった。これはルートセンサスのコースに樹林やその周辺環境が少ないことに起因しているからかもしれない。

特記すべき種としては次の数種を挙げておきたい。

- ・ジャコウアゲハ：食草のウマノスズクサの分布が大原では局所的なためか、そんなに見られる種ではない。飛来個体が一時的に発生するとも考えられるので発生状況を見ていきたい。
- ・キマダラルリツバメ：京都府の準絶滅危惧種に指定されている種で、大原では以前から数か所で生息が確認されていたが、今回ルートセンサスのコースにある桜並木で生息が確認できたことは非常に喜ばしい限りである。生息状

表1 2023年 大原ルートセンサスの結果（チョウ類）

調査日	5月17日	6月7日	7月4日	7月19日	8月16日	9月13日	10月11日	11月4日	計
ジャコウアゲハ	1								1
アオスジアゲハ	1	1			1				3
クロアゲハ					2				2
アゲハ		1				2			3
キアゲハ		1		1	1				3
ナガサキアゲハ						1			1
モンキアゲハ		1			2				3
オナガアゲハ					1				1
モンシロチョウ	12	20	7	2	1	6	7	13	68
キタキチョウ	1	2	2	1	5	12	20	13	56
モンキチョウ	6	6		5				1	18
ウラギンシジミ	1				2	1	2	3	9
ゴイシシジミ					1				1
ムラサキシジミ					1	2			3
ウラゴマダラシジミ		1							1
ベニシジミ	1		11	2		1	1	4	20
ウラナミシジミ							3	1	4
ヤマトシジミ	9		1	1	7	90	36	64	208
ツバメシジミ		1	5						6
ルリシジミ		11		1		1			13
アサギマダラ							1		1
テングチョウ	1	1				1			3
キタテハ		6		1		3	5	11	26
アカタテハ						1	4		5
ミドリヒョウモン							1		1
ウラギンヒョウモン		1					1		2
ツマグロヒョウモン	2			1	1	2	9	6	21
コムシジ						2			2
ホシミスジ			1						1
アサマイチモンジ		2	1		1				4
サトキマダラヒカゲ					1				1
ヒメウラナミジャノメ	15	13	23	12	10	29	2	1	105
ヒメジャノメ						1			1
クロコノマチョウ			1		1			2	4
ヒカゲチョウ		5	1		1				7
クロヒカゲ							1		1
アオバセセリ					1				1
ダイミョウセセリ	1	1				2			4
クロセセリ							1		1
ヒメキマダラセセリ	2				5	2			9
キマダラセセリ					1				1
チャバネセセリ						1	1	1	3
オオチャバネセセリ			1	2	1	1			5
イチモンジセセリ					1		1		2
個体数	53	74	54	29	48	161	96	120	635
種類数	13	17	11	11	22	20	17	12	44

表2 2024年 大原ルートセンサスの結果（チョウ類）

調査日	4月10日	4月25日	5月8日	5月22日	6月12日	6月26日	7月10日	7月24日	8月14日	8月28日	9月11日	9月25日	10月9日	10月30日	11月13日	計
アオスジアゲハ			1	1												2
クロアゲハ			3	1								1				5
アゲハ		1	1	1	1											4
キアゲハ					1							4				5
カラスアゲハ				2												2
オナガアゲハ			1													1
モンシロチョウ	24	22	5	30	74	34	13	2	2		1	1	5	6	3	222
ツマキチョウ		1														1
キタキチョウ	3	2		1	3	3	1	10	11	13	16	15	18	18	8	122
モンキチョウ	1	2	14	5	13	10					2	4			1	52
ウラギンシジミ					3	1		2	1	1		3			3	14
ムラサキシジミ					2		1	2		1	2					8
トラフシジミ			1													1
ウラゴマダラシジミ					1											1
キマダラリッパメ						1										1
ベニシジミ		5	8		3	10	3	3	1	2	2			1	6	45
ウラナミシジミ										6	1	12	11	7	5	42
ヤマトシジミ		2	25	3		33	6	36	14	38	77	47	82	101	86	550
ツバメシジミ		1				12	5	4	1	2	4	9	7			45
ルリシジミ	1	2			9	2		2			1					17
テングチョウ		1		2	4		1									8
キタテハ	2	3	1	1	1	1		4			1	2		18	9	44
アカタテハ		2			3								1			6
ヒメアカタテハ												2				2
ミドリヒョウモン					1											1
ツマグロヒョウモン									1		2	9	1	5	2	20
コムシジ			1						1		1	1	1			5
ミスジチョウ					1											1
イチモンジチョウ				4	3											7
アサマイチモンジ					2		1			3						6
サトキマダラヒカゲ				5	6						1					12
ヒメウラナミジャノメ		6	67	25	11	5	35	19	12	42	28	4		1		255
ヒメジャノメ					1						1					2
クロコノマチョウ		1	1					1		1		2	6	3		15
ヒカゲチョウ					8	3			3		5					19
ダイミョウセセリ			4		1					3						8
クロセセリ												2				2
ヒメキマダラセセリ				3						1						4
キマダラセセリ										6	1					7
チャバネセセリ									1	1	1	8	3	1	2	17
オオチャバネセセリ							1					2				3
イチモンジセセリ										6		1				7
個体数	31	51	133	84	152	115	67	85	48	126	147	130	136	161	125	1591
種類数	5	14	14	14	22	12	10	11	11	15	18	20	11	10	10	42

況を詳しく調べて保護対策を考えたい。

- ・ゴイシシジミ：ササやタケにつくアブラムシに依存しているチョウで、生息地域がたいへん局地的である。このような種がまだ大原に生息していることが確認できたことで、大原の昆虫の多様性を感じることができた。各種の開発で生息地が失われる可能性が大きいと思われるので、大原での分布について調べていきたい。

3. トンボ類調査結果

2023年と2024年の調査結果が表3と表4である。

2023年には14種195頭、2024年には17種414頭を確認した。

記録からは、シオヤトンボやダビドサナエのように春によく見られる種と、ハグロトンボやシオカラトンボ、ウスバキトンボのように主に夏に個体数を増やす種、秋に見られ

表3 2023年 大原ルートセンサスの結果（トンボ類）

調査日	5月17日	6月7日	7月4日	7月19日	8月16日	9月13日	10月11日	11月4日	計
ハグロトンボ						17	4		21
アサヒナカワトンボ	1	1							2
ミヤマカワトンボ			2	1					3
ギンヤンマ							1		1
コオニヤンマ						3			3
ウチワヤンマ				1					1
シオヤトンボ	1	1							2
シオカラトンボ	1		12	10	17	7	1		48
オオシオカラトンボ				2	1	3			6
ウスバキトンボ		1		1	16	26			44
ハラビロトンボ			1						1
ナツ・アキアカネ					1	1	3	37	60
ノシメトンボ							1	1	2
マユタテアカネ								1	1
個体数	3	3	15	16	55	45	40	18	195
種類数	3	3	3	6	6	7	4	1	14

表 4 2024 年 大原ルートセンサスの結果（トンボ類）

調査日	4月10日	4月25日	5月8日	5月22日	6月12日	6月26日	7月10日	7月24日	8月14日	8月28日	9月11日	9月25日	10月9日	10月30日	11月13日	計
ハグロトンボ								1	5	18	4	3				31
ニホンカワトンボ		14	20	9	1											44
ダビドサナエ		10	1	1	2											14
コオニヤンマ							2	1								3
ウチワヤンマ										1						1
オニヤンマ										1		1				2
コヤマトンボ				1		1	2		1							5
シオヤトンボ		2	3	4	1											10
シオカラトンボ			2	6	1			17	45	15	7	3				96
オオシオカラトンボ								4			1		1			6
チョウトンボ							1									1
ウスバキトンボ						1	24	4	5	26	29	15				104
ハラビロトンボ								2								2
アカアカネ											1	49	7	13		70
ナツアカネ												9	4	8	2	23
ヒメアカネ										1		3	6	1	8	19
ムタテアカネ								1			1		4	1	2	9
個体数	0	26	26	21	5	2	29	30	56	62	43	83	22	23	12	440
種類数	0	3	4	5	4	2	4	7	4	6	6	7	5	4	3	17

個体数を増やすアカネ類が生息していることがわかる。

生息環境を考えると、流水域に分布するカワトンボ類やダビドサナエは見られたものの大半は止水や水田、湿地に生息する種であった。

特記すべき種として次の種を挙げる。

- ・チョウトンボ

平地や丘陵地の池沼に生息する種である。ルート内にはそのような環境が見当たらないことからどうして見つかったのか不思議である。今後も生息が確認できるか注視したい。

- ・カワトンボ類

2023 年にはアサヒナカワトンボとミヤマカワトンボが記録されているが、2024 年にはニホンカワトンボしか記録されていない。「近畿のトンボ図鑑」によると 3 種とも分布しているとされているので記録についてはうなずけるのだが、3 種の同定には注意が必要と思われることから今後はより厳密に同定をしていく必要を感じる。

4. 終わりに

2 年間の調査によって、チョウ類については草地や畑地を生息域にする種類が多いこと、トンボ類については水田や休耕田周辺に見られる種が多いことが分かった。また、キマダラルリツバメやゴイシシジミ、チョウトンボが記録されたことから大原の昆虫相の多様さを知ることができた。

しかし、今回の調査だけでは、大原地区の昆虫相を十分に語ることはできない。大原地区の大半を占める樹林帯や高野川流域といった環境の昆虫相について調べるための新たなルートを設定して調査を進めていく必要がある。

5. 参考文献

日本チョウ類保全協会 (2019) フィールドガイド 日本のチョウ 誠文堂新光社, 東京

山本哲央・新村捷介・宮崎俊行・西浦信明 (2009) 近畿のトンボ図鑑 いかだ社, 東京

(文責: 小松清弘)

<2 月おもな活動の報告>

◆2 月 5 日 (水) 10:00～、13:30～ (報告者: 奥谷)

○参加者 小松、藤野、的場、塩尻、大友、奥谷、計 6 名

○活動内容

(午前) 大原文化 C

- ・ 会議 ①連絡
 - ・ 鯖街道サミットについて
 - ・ レッドデーターから見る府の生物多様性講演会について
 - ・ ルートセンサス講演会について
 - ②記念展示について「昆虫から見た大原の自然」
 - ・ III 大原の昆虫、IV その他 について打ち合わせ
 - * 打ち合わせ結果、資料等については藤野さんから別途報告があります。
 - ・ I・II 進捗状況について
 - ・ 記念展示の準備
 - I・II 担当; I と II の展示場所、展示方法、パネル数、標本箱数、パーティション数の検討
 - III 担当; 標本整理
- (午後) 大原文化 C
- ・ 記念展示の準備
 - I・II 担当; I オオムラサキのパネルと標本箱の展示場所の検討 III 担当; 標本整理

◆2 月 12 日 (水) 10:00～、13:30～ (報告者: 小松)

○参加者 藤野、木村、塩尻、的場、村上、小松、計 6 名

○活動内容 (午前・午後: 大原文化 C)

- ・ 打ち合わせ
 - ①日当等報告書類について
 - 予算額より多い分については山下さんと相談する。
 - ②本日の活動について
 - ③展示品について
 - ・ 更新の検討
 - ・ キャッチコピーの試作品について
 - ・ アンケートについて
 - ・ ポスター、案内チラシについて
 - ・ 購入物品について
 - ・ sabakaidou summit 2025 への参加について
 - ・ フジバカマへの施肥、薬剤散布
- ・ 作業
 - ①パネル等の点検と更新打ち合わせ
 - ②標本の点検、標本箱の整備等

◆2 月 26 日 (水) 10:00～、13:30～ (報告者: 奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、的場、塩尻、大友、村上、奥谷、計 8 名

○活動内容

(午前) 大原文化 C

- ・ 会議 ①本日の活動内容

②活動費について；日当、資材費 — 山下さんと相談の上支給

③特別展示品について検討

(1)展示品等の準備

・ 展示名のパネルの追加 ・ 配布物；ポスター、案内チラシ、はがき ・ 購入物品

(2)大原アサギマダラ標識調査報告について (3)蝶から見た大原の環境について

(4)大原のフジバカマについて (5)Ⅱの展示パネルの変更について

(6)昆虫の捕まえ方について

・ 記念展示の準備；パネルの点検、標本点検整理

(午後) 網室、ドングリ園

・ フジバカマ園への施肥薬剤散布 ・ 網室外エノキに網掛け ・ 網室外エノキに鹿よけ網の設置

・ ドングリ園のエノキに畔シートの設置

【あとがき】

3月 は 20 周年記念展示「昆虫からみた大原の自然」の準備、そして開設に大忙しであった。それによりこの 12 号の発刊も 10 日遅れとなった。

飼育網室に約 2 万頭の幼虫が眠っている。昨年 12 月の一斉捜査で探し出したこれらのうちから 150 頭ずつ、計 900 頭を 6 本のエノキの下に放したが、3 月 12 日には樹上に数頭の幼虫を見出して、いよいよ動き出した。寒い日が多かったが、幼虫の目覚めは例年通りのようだ。しかしウメの開花は 2 週間前後遅れている。自然の移ろいが全般的に遅れ気味である。エノキの発芽も遅れるかもしれない。心配なのは腹をすかせた幼虫が、まだほころびる前の芽を齧りつくしてエサ不足になることである。前年度の反省から、網室内に放す幼虫の数を 1200 頭から 900 頭に減らしたが、今年もエサ不足になるかもしれない。幼虫を網室の外のエノキに取り付ける作業を覚悟しておくのがいいだろう。このようなことの繰り返して、網室内エノキの樹勢の劣化も心配だ。

近年は 4 月中旬に春の第 1 回目の脱皮を観察している。これまでなら、これを 5 齢への脱皮と表現できたが、越冬幼虫は 4 齢と 5 齢が混在していることが明らかになりつつあるので、表現が容易でなくなった。どの程度の割合で混在しているのかを調べるために、4 月中旬の脱皮時に、その頭殻を拾って測定する予定で、これが春の調査で大きな位置を占めている。それまではエサ不足ならずに、網室内で恙なく過ごしてくれることを願う。

= 目 次 =

UMA (未確認生物) ！ ツチノコ ？	1
大原 ルートセンサス報告	3
2 月おもな活動の報告	7
あとがき・目次	8

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬萊むしの会

2025 年 3 月 20 日

第 12 号

大原のオオムラサキを守る会 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町 54 小松清弘

蓬萊むしの会 〒520-0105 大津市下坂本 1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原 21-151 藤野適宏